

2020 年度

異文化を体感しにくいコロナ禍における

新たなダイバーシティ教育プログラム

（視覚障害者との交流・対話プログラム）

アンケート結果報告書

2021 年 5 月

一般社団法人ダイアログ・ジャパン・ソサエティ

目次

1. 実施概要

2. 効果測定実施

- 2－1. 異文化、特徴の異なる人々への関心の高まりがみられた。
- 2－2. 障害者に対する印象が好意的に変化した。
- 2－3. 他者・他人への関心の高まり、そして他人の喜びが自身の喜びへと昇華した。
- 2－4. 7割の生徒が、体験を通して考えが変わったと回答した。
- 2－5. 今回の調査で得られた他の知見（自己肯定感の向上など）

3. フリーアンサーから見える傾向

- 3－1. 障害者に対して抵抗がなくなった、親しみが湧いたという回答が多く見られた。
- 3－2. 障害者のみならず、自分と違う他人、そして自分自身とより友好的に関わりたいという回答が多数見られた。（ダイバーシティに対するポジティブな考えの芽生え）
- 3－3. コロナ禍ならではの回答も散見された。

4. まとめ

写真

1. 実施概要

日程：3月18日（木）、19日（金）各回3時間

対象：海外研修が中止となった中学3年生4クラス 合計116名

場所：東京都立白鷗高等学校附属中学校 <http://hakuo.ed.jp/web/>

※文部科学省「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」共同実施校

内容：

コロナ禍の影響で例年開催していた海外・国内研修が中止となった中学3年生を対象として、異文化を体感しにくい今だからこそ「新たなダイバーシティ教育プログラム」として、ダイアログ・イン・ザ・ダーク（※1）で案内人を務める視覚障害者が学校に赴き、生徒とともに遊びながら交流を図る。

プログラムの流れ：

- ① 「1.5メートルのソーシャルディスタンスを図ってでも、視覚障害者とともに遊ぶ方法」を生徒たちと視覚障害スタッフが考え、実践
- ② 視覚障害スタッフにも伝わる方法でプレゼンテーションを実施
- ③ スタッフによる各チームの講評
- ④ スタッフとの対話の時間

目的：

- ・ 異国の文化をリアルに経験できない今、より身近なダイバーシティ教育として視覚障害者と実際に出会い、交流・対話を行うことで、ダイバーシティ体感はもちろん、SDGs目標である「誰一人取り残さない社会」の実現へと目を向けることを目指す
- ・ 「遊び」を全く異なる文化をもつ視覚障害者を交え考えることで、異なる他者を思いやる力や想像力を育む。

※1 ダイアログ・イン・ザ・ダーク

純度100%の真っ暗闇の中で、見ること以外の感覚を使い、驚きに満ちた発見をしていくエンターテイメント。体験を案内するのは、普段から目をつかわない視覚障害者のアテンドです。視覚以外の感覚を広げ、新しい感性を使い、チームとなった方々と様々なシーンを体験します。1988年、ドイツの哲学博士アンドレアス・ハイネッケの発案によって生まれ、これまで世界50か国以上、800万人以上が体験。日本では1999年に初開催し、これまで23万人以上が体験。

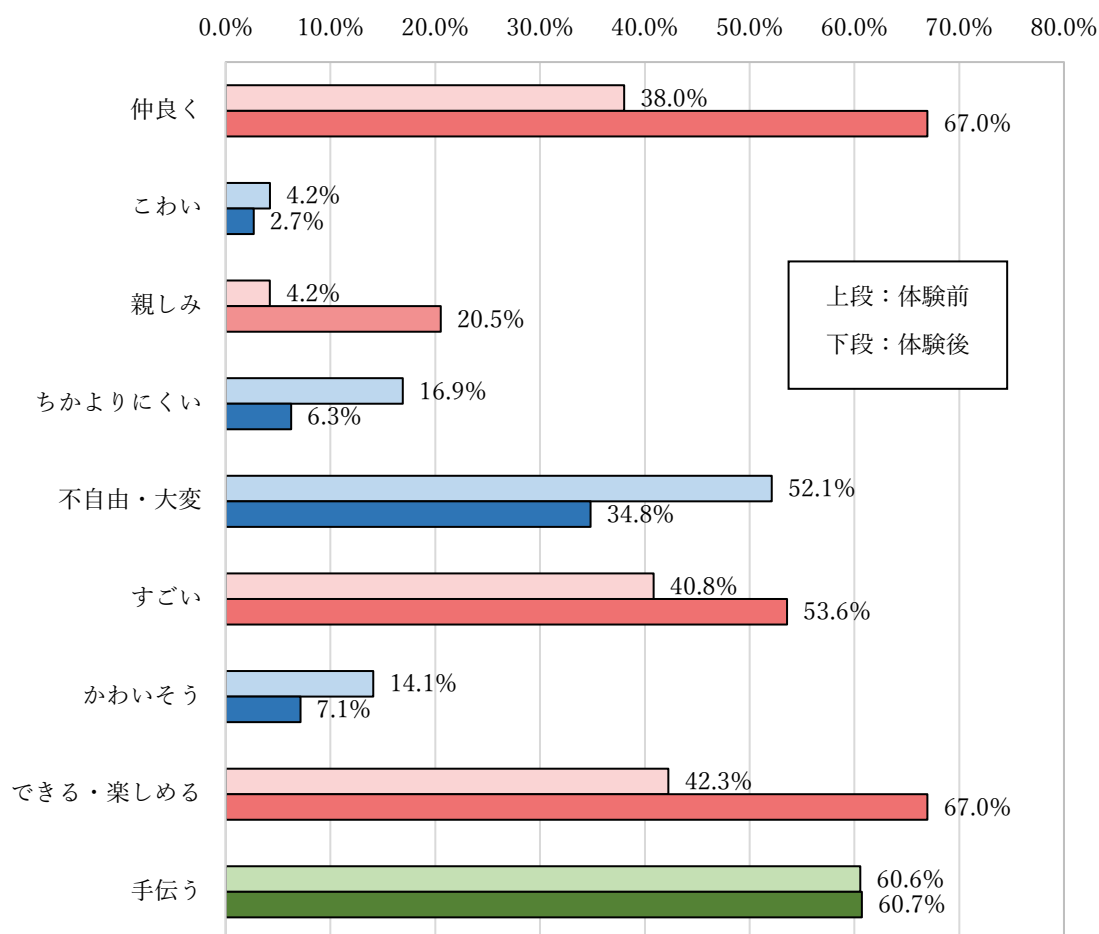
2. 効果測定実施

体験生徒に対してアンケートを実施。同じ設問項目に対する数値比較を検証した。グラフ 1～5, 7～9 に関しては、体験前・体験後の比較グラフであり、3 クラスから得た 69 名の回答に関して分析した。グラフ 6. 10 は体験後のみの項目で、4 クラスから得た 106 名の回答に関して分析した。

2-1. 異文化、特徴の異なる人々への関心の高まりがみられた。

アンケート項目「自分たちとは文化やとくちょうがちがう人たちとふれあうことについて、あなたはどのように思いますか」に対し、あてはまるものを選択してもらった。その結果、体験の前後で「ふあん」や「こわい」などネガティブな印象が減少し、「わくわく」「楽しそう」「いいことだと思う」などといったポジティブな印象が増加した。視覚障害者であるスタッフとの交流を通して、異文化、多様な人々への関心が高まったといえる。

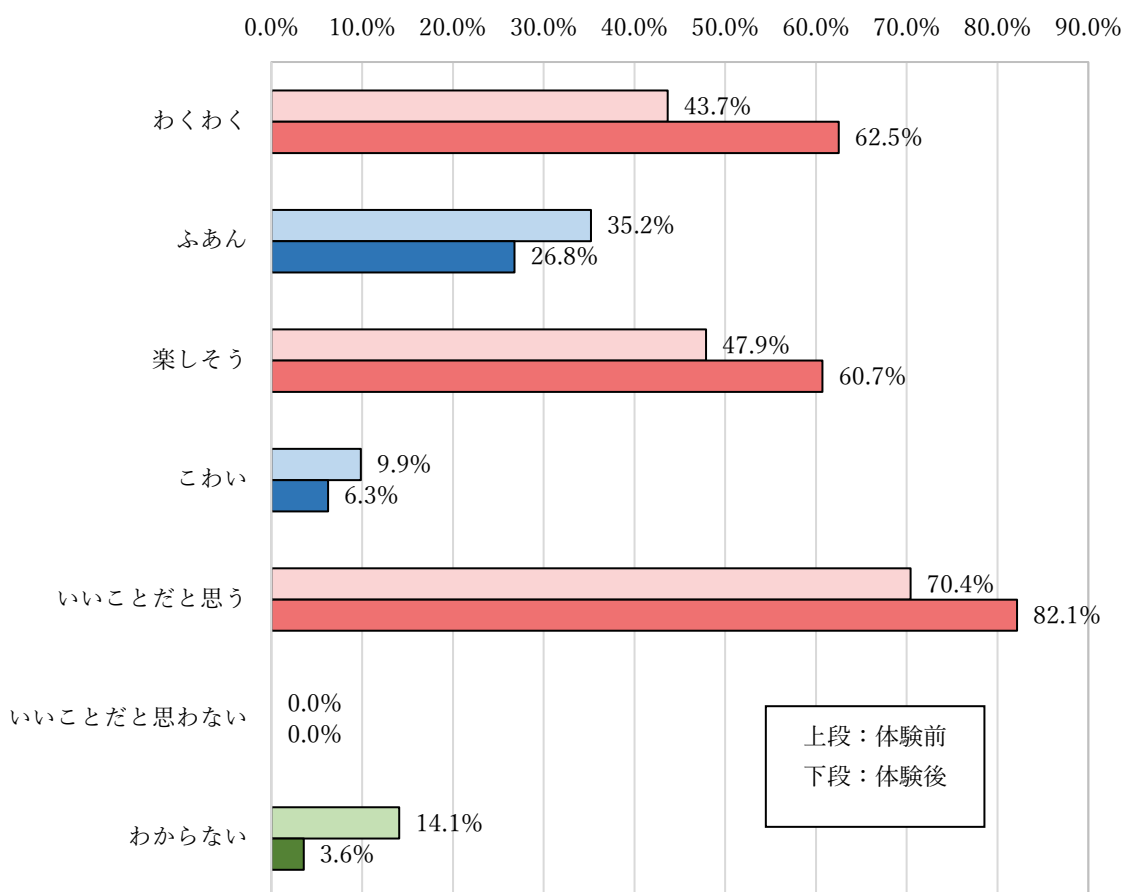
グラフ 1. 障がいのある人について、どのように感じていますか。



2-2. 障害者に対する印象が好意的に変化した。

アンケート項目「障がいのある人について、どのように感じていますか。」に対して、当てはまるものを選択してもらった。「仲良く」「親しみ」「できる・楽しめる」など**ポジティブな項目のポイントが増加した。対照的に、「不自由・大変」「かわいそう」のポイントが減少**した。フリーアンサーにも多くの記述がみられたように、これまで遠い存在と捉えていた障害者を身近に感じ、「支援される立場」としてフォーカスが当たりがちな障害者を、より対等な存在として捉えなおす傾向が見受けられた。

グラフ2. 自分たちとは文化やとくちょうがちがう人たちとふれあうこと
について、あなたはどのように思いますか。

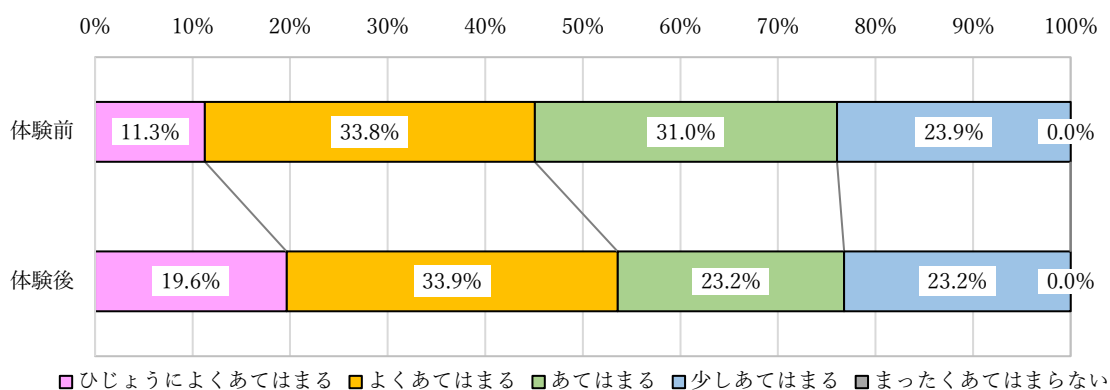


2-3. 他者・他人への関心、他人と喜びを共有したいという意欲が向上した。

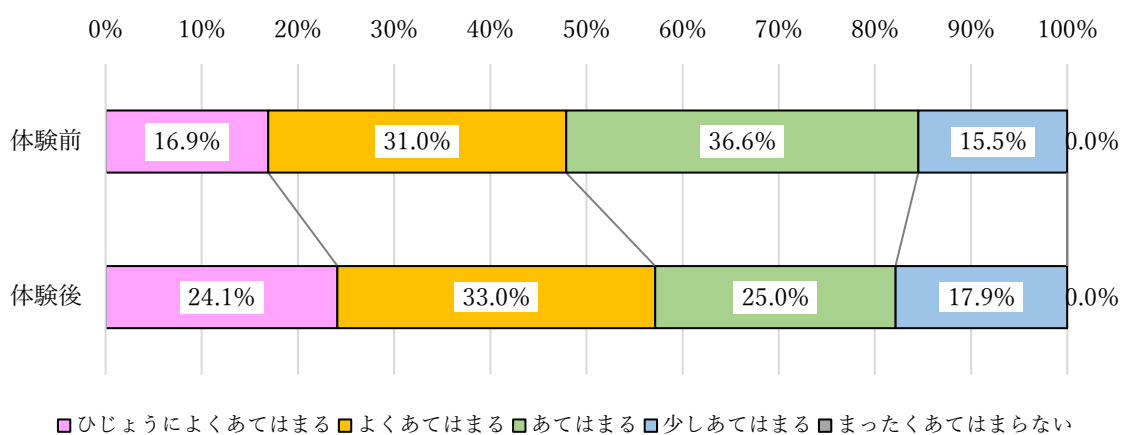
アンケート項目「相手のよろこぶことをしてあげたくなる」では、ひじょうにあてはまる・あてはまると回答した生徒の合計の割合は、体験前で45.1%、体験後で53.5%と、体験前後で8.4ポイント増加した。同様に、「相手がよろこんでいると自分もうれしくなる。」にてその割合は体験前後で9.2ポイント増加、「どうすれば相手によろこんでもらえるかを考えたい」にいたっては、体験前後で11.4ポイント増加した。

これらのことから、体験を通して他者・他人への関心が向上したことはもちろん、他人と楽しさを共有すること、他人を喜ばせることに自身も喜びを感じられるという学びを、生徒らが得たことがわかる。

グラフ3. 相手のよろこぶことをしてあげたくなる。

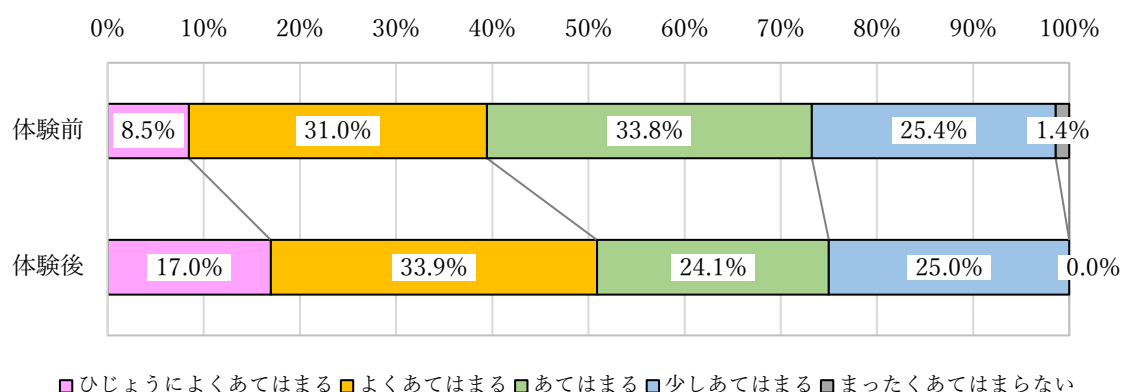


グラフ4. 相手がよろこんでいると自分もうれしくなる。



ひじょうにあてはまる・あてはまると回答した生徒の割合は、
体験前では47.9%、体験後では57.1%と、前後で9.2ポイント増加した。

グラフ 5. どうすれば相手によろこんでもらえるかを考えたい。

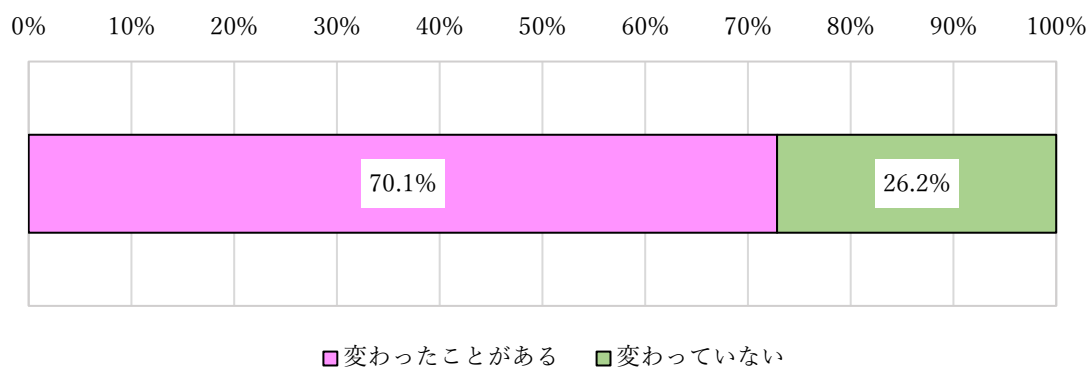


ひじょうにあてはまる・あてはまると回答した生徒の割合は、
体験前では 39.5%、体験後では 50.9%と、前後で 11.4 ポイント増加した。

2-4. 7割の生徒が、体験を通して考えが変わったと回答した。

体験後アンケートの項目「体験したことで、何か考えが変わったことはありますか？」という質問に対して、70.1%の生徒が「考えが変わった」と回答した。また、この項目では、自身の考えの何がどんなふうに変ったかどうかについても、フリーアンサー形式で回答を得ており、それらの結果は 3. フリーアンサーから見える傾向で紹介する。

グラフ 6. 体験をしたことで、何か考えが変わったことはありますか？

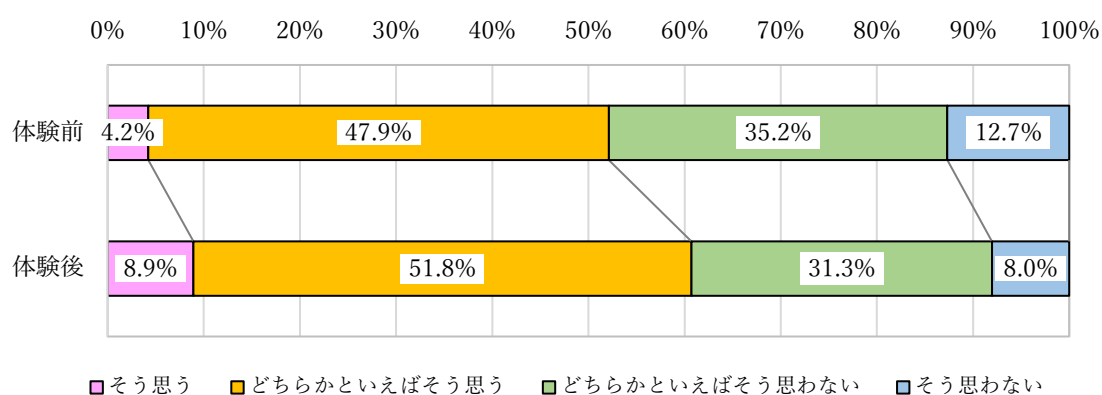


2-5. 今回の調査で得られた他の知見（自己肯定感の向上など）

上記のほかに、「自分自身にまんぞくしている」「自分のきぼうはいつかかなうと思う」「人のことがしんらいできると思う」「体験を、誰か他の人にもすすめたいと思いますか。」の4項目についてもアンケート調査を実施し、その結果はグラフ7～10のようになった。

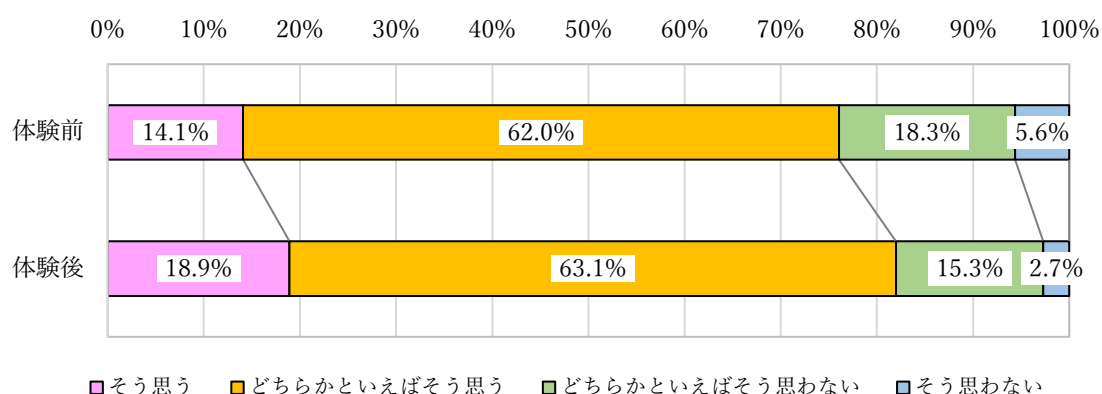
そのうちグラフ7.「自分自身にまんぞくしている」においては、そう思う・どちらかといえばそう思うと回答した生徒の割合が体験の前後で8.6ポイント増加した。これにより、体験を通して生徒の自己肯定感が向上することが示唆された。

グラフ7. 自分自身にまんぞくしている。



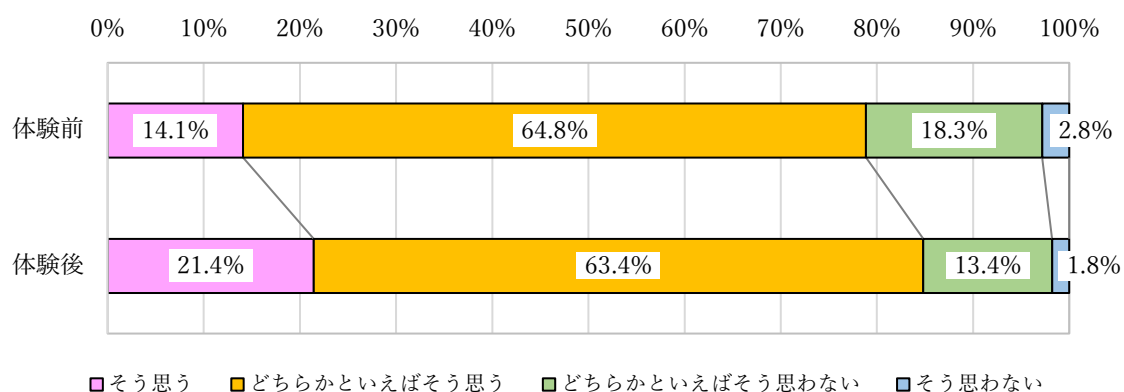
そう思う・どちらかといえばそう思うと回答した生徒の割合が、体験前では52.1%、体験後で60.7%となった。

グラフ8. 自分のきぼうはいつかかなうと思う。



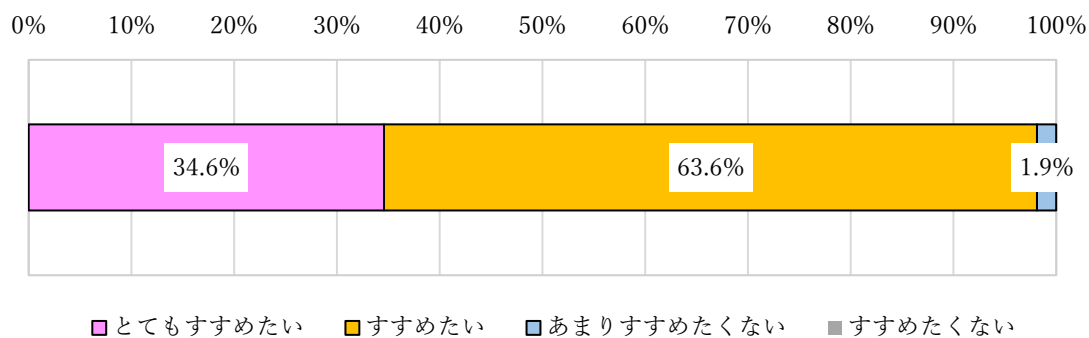
そう思う・どちらかといえばそう思うと回答した生徒の割合が、体験前では76.1%、体験後では82.0%となった。

グラフ 9. 人のことがしんらいできると思う。



そう思う・どちらかといえばそう思うと回答した生徒の割合が、体験前では 78.9%、体験後では 84.8% となった。

グラフ 10. 体験を他の人にもすすめたいと思いますか。



特にすすめたい人として「弟」「妹」などの兄弟姉妹という回答が最も多く挙がり、
「親」「家族」「学生」「他校の同級生」などの友人 が続いた。

3. フリーアンサーから見える傾向

生徒らには、体験後のアンケート項目として以下の4つの質問にフリーアンサー形式で回答してもらい、4クラス106名の回答を得た。ここでは回答から見られた全体の傾向をまとめた。

【体験後アンケート／フリーアンサーの質問項目】

- ・ダイアログ・イン・ザ・ライト（※1）を体験して楽しかったこと、嬉しかったこと、良かったことがあれば教えてください。
- ・ダイアログ・イン・ザ・ライトを体験したことで、何か考えが変わったことはありますか？（考えがかわったことがある、何も考えは変わっていないの2つから選択（グラフ6参照）／自由記述項目として「何がどんなふうになりましたか？」を記載）
- ・ダイアログ・イン・ザ・ライトを体験したことで、これからやってみようと思うことはありますか？
- ・一緒に遊んだ視覚に障がいがあるアテンド達（※2）に伝えたいことがあれば書いてください。

※1：今回の体験プログラムの名称。

※2：ダイアログでは、プログラムを担当する視覚・聴覚障害スタッフをアテンドと呼んでいる。

以下、フリーアンサー原文より抜粋。

3-1. 障害者に対して抵抗がなくなった、親しみが湧いたという回答が多く見られた。

【何がどんなふうに変ったかという質問に対して】

- ・障害者の方に壁を感じていたが、それがなくなった
- ・ちょっと助けることに怖さがあったが怖くなくなった
- ・一緒に話したりしてみて、前までは少し障害者の方に抵抗がありましたが、それもなくなりました。
- ・障がい者と関わるのが怖かったけれど、今は自分の知らない人を知れることがワクワクして思えます。
- ・障がいをもった方と接することへの難しさを感じていたが、すぐに仲良くなれたと感じる
- ・すぐにさけるのではなく、関わることで新しいことがわかるかもしれないから積極的に関わりたい。
- ・障がい者の人は暗めというイメージがあったが明るくてフレンドリーというイメージに変わった。
- ・もっと障害者と向き合えるようになった
- ・目が見えなくてもすごい大きな違いはないと知れた。（遊んだりする上では）

- ・障害などがあっても他の人と差はほとんどない。
 - ・～ができないから～をこう変えたらできるのではと前向きにとらえたことができた
- 【これからやってみようと思うことはあるかという質問に対して】
- ・偏見を持たず、きちんとした対応で障害者の人と関わっていきたい。
 - ・障害者の人に親しみを感ずることができた。
 - ・今まで以上に障害者の方に親しみが湧いた
 - ・目の見えない人や耳の聞こえない人ともコミュニケーションをとる。
 - ・障害者の私生活も知りたくなった。
 - ・もし障がいを持つ人がいて、困っていたら、勇気を出して話しかけたり、手助けをしたりしたいなと思いました。

3-2. 障害者のみならず、自分と違う他人、そして自分自身とより友好的に関わりたいたいという回答が多数見られた。(ダイバーシティに対するポジティブな考えの芽生え)

- 【何がどんなふうに考えが変わったかという質問に対して】
- ・自分と違う人のことを考えるのはとても難しい。頑張ってもなりきってみても、節穴がある。でもワクワクした！
 - ・相手の立場になって考えてみると、当たり前の概念が変わり、様々な見方ができるのだと分かりました。
 - ・周りが自分と同じだと考えずに、皆で楽しくすごしたい
 - ・自分さえ分かれば良いと思っていたものが、様々な人に分かるようにしたほうが良いと感じた。
 - ・他の人を以前よりは信頼できるようになったと思う

- 【これからやってみようと思うことはあるかという質問に対して】
- ・「他の人」がどう感じているのか共感すること。
 - ・自分と違う立場に立って考えたい
 - ・人の気持ちや立場を考えると、もっと沢山考える。
 - ・他人の立場を考えて話すようにしたいです。
 - ・いつも話さない人とも話してみようと思った。
 - ・色々な立場の人ともっと交流をもつ。
 - ・何かをするときに、自分とは違った特徴のある人でも楽しめるか、誰かが取り残されていないかを考えるようにしたい。

- 【楽しかったこと、嬉しかったこと、良かったことはあるかという質問に対して】
- ・自分自身のことやまだ知らない色々な人にひきつけられたこと。

- ・皆と真剣に遊びを考えられたのがすごい楽しかった！普段あまり話したことのない方々と明るくすごせたのが嬉しかった。
- ・色々な人と関りを持ててよかった
- ・みんなで考えてつくりだすのは楽しかった。
- ・みんなが楽しく遊べるように考えてつくれて良かった。とにかく楽しかった。
- ・皆であそべたのが楽しかった。
- ・皆で色々考えること。
- ・みんなが楽しめるような遊びを考えられたのが良かった。
- ・皆で協力してゲームを作れたこと。

3-3. コロナ禍ならではの回答も散見された。

- ・活動の全てが楽しかった。他の人と遊んだのが久々だったので面白かった。
- ・久しぶりに学校で遊びができて良かった。

4. まとめ

本プログラムの体験により、生徒たちの他者への関心、さまざまな特性や障害、異なる文化を持つ人々との交流に対する意欲が高まることが示唆された。ダイバーシティに対するポジティブな考えの芽生えは、2030年に世界が目指すSDGs目標「誰一人取り残さない社会」実現への近道となりうるものといえる。

また、海外や遠方への移動の制限により異文化を体験することが困難なコロナ禍においてはとくに、本プログラムが学校行事や海外研修に代わる新たなプログラムとなることが期待される。

写真

